



●国際連合大学 2017-2018 年国際教育交流事業●

インド教職員招へいプログラム

実施報告書

2017 年 11 月 5 日 - 11 月 12 日

国 際 連 合 大 学 (UNU)
公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)



●国際連合大学 2017-2018 年国際教育交流事業●

インド教職員招へいプログラム

実施報告書

2017 年 11 月 5 日 - 11 月 12 日

国 際 連 合 大 学 (UNU)

公益財団法人 ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

はじめに

国際連合大学（United Nations University）は、持続可能な人類の安全保障、気候変動、開発、平和構築など、国連とその加盟国が直面している、喫緊の地球規模の諸問題の解決への取組に、研究、教育、能力開発、知識の普及を通じて寄与することを目的とする国連機関です。

国際連合大学は、2002 年より主にアジア太平洋地域の教職員や教育分野の専門家等の資質の向上と相互理解の促進を目的とし、日本政府からの拠出金をもとに「日本国際教育交流プロジェクト」を開始しました。2000 年に設立された「ユネスコ青年交流信託基金」で実施されていたプログラムは、同年より本事業のもとで開催されることになり、国際連合大学の委託を受け、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は、これまでに韓国、中国、タイとの交流を行い、韓国・中国からはそれぞれ 1500 名以上、タイからは 45 名の教職員を招へいしてきました。2016 年からは、この国際教育交流事業の一環として、さらに多くの国の教職員との交流を図るため、文部科学省、インド連邦政府人的資源開発省（MHRD: Ministry of Human Resource Development）、インド環境教育センター（CEE: Centre for Environment Education）の協力のもと、新たに「インド教職員招へいプログラム」が始まり、第 1 回となる 2016 年は 14 名のインド教職員を本邦に招へいしました。

日印友好交流年記念事業としても認定された今回のプログラムでは、2017 年 11 月 5 日から 12 日まで、インドの小・中・高等学校の現職教職員等 15 名を日本に招へいしました。参加者は、日本の初等中等教育についての講義、学校や文化施設の訪問、日本教職員との教育交流会等を通して、日本の教育制度や持続可能な開発のための教育（ESD）の実践および日本の文化・伝統についての理解を深めるとともに、両国間の相互理解と友好促進に貢献しました。

実施にあたりましては、文部科学省、インド連邦政府人的資源開発省、インド環境教育センター、訪問先の学校、その他教育・文化機関等、多くの方々の多大なるご支援とご協力をいただきました。ここにあらためて、関係の皆様方に厚く御礼申し上げます。

2018 年 2 月

国際連合大学

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

目次

第Ⅰ章	実施内容	5
-----	------	---

第Ⅱ章 コメントと提案

1.	インド教職員	19
2.	訪問受入れ機関	28
3.	事業主催者・担当者	32

付録

1.	実施要項	35
2.	プログラム日程	37
3.	参加者リスト	41
4.	関係機関リスト	42
5.	文部科学省講義資料	45
6.	写真	49

第Ⅰ章 实施内容

1. 来日、オリエンテーション (第1・2日)

「インド教職員招へいプログラム」の参加者15名は、2017年11月5日(日)にインドを出発、翌6日(月)の朝に日本に到着した。同日、宿泊先である新宿プリンスホテルの会議室「ガーネット」にてオリエンテーションが行われた。

はじめに、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)人物交流部の進藤由美部長が、「日本の学校や先生方との交流を深めていただき、それぞれの目的が達成されますことを心から祈念しております」と参加者に歓迎の挨拶を述べた。続いて随行するACCU職員が紹介され、最後に、担当職員よりプログラム日程の説明や滞在ガイダンス等が行われた。



オリエンテーションの様子

2. 文部科学省表敬訪問(第3日)

プログラム3日目の11月7日(火)午前中は、文部科学省への表敬訪問を行った。はじめにインド教職員訪問団を歓迎して、文部科学省大臣官房国際課長の里見朋香氏

より英語での挨拶があった。日本とインドとの交流の重要性を強調し、「学校訪問を通して、各学校での実践を見ていただくとともに、日本の教員や生徒達との交流、文化体験などを通じて知見を深めていただきたいと思います。また、このプログラムを通して出会う日本の先生方とは、帰国後もぜひ教員同士の交流を続けてください。」と述べ、訪問団を歓迎した。次に訪問団代表として、インド連邦政府人的資源開発省のプージャ氏による挨拶があった。本事業の開催に対して感謝の言葉を述べたあと、インドの教育事情や現在抱えている問題などを紹介しながら、このプログラムに対する期待を述べた。

挨拶に続いて、里見氏とプージャ氏、およびインド環境教育センターのヒマーシュリー・バッタチャリヤ氏の間で記念品交換が行われた。

最後に全員で集合写真を撮影し、表敬訪問を締めくくった。



プージャ氏の挨拶



記念品の交換（左：里見朋香氏、右：ヒマーシュリー・バッタチャリヤ氏）

3. 講義（第3日）

「日本における初等中等教育について」
文部科学省 初等中等教育局
国際企画調整室 市川 清治 氏

表敬訪問に続いて、同会場にて日本における初等中等教育について、文部科学省の講義が行われた。講師は初等中等教育局国際企画調整室の市川清治氏であった。講義内容は以下の通り。

日本の基本的な初等中等教育制度

- ① 学校体系、学校数について
- ② 在籍者数・就学率の経年変化
- ③ 義務教育制度の概要
- ④ 義務教育費国家負担制度の概要
- ⑤ 教科書制度
- ⑥ 教育委員会制度の仕組みと趣旨
- ⑦ 教育行政における国・都道府県・市町村の役割分担
- ⑧ 「学校」の在り方の国際比較
- ⑨ 日本の学校教育の特徴
- ⑩ 学習指導要領
- ⑪ 主体的・対話的で深い学びの実現
- ⑫ 「次世代の学校・地域」創生プランの実現に向けて

訪問団は熱心に講義を聞き、講義の後には、「自治体の役割について」「能力の秀で

た子どもに対する特別な教育制度の有無」「経済的に困難な家庭の子女に対する援助」など活発に質問をする姿が見られ、実際の学校訪問に向けての期待が高まった。



市川氏の講義



熱心に講義を聴く訪問団

4. 恵泉女学園中学・高等学校（第3日）

同日午後には、恵泉女学園中学・高等学校を訪問した。1929年に創立された同校は、キリスト教主義（プロテスタント）の私立女子中高一貫校である。「個としての自覚に目覚めた女性・平和への不屈の意志を持つ女性・『いのち』の尊さを知る女性・知的探究心と確かな学力を備えた女性」を育てたい生徒像として、通常教育課程に加え、聖書・国際・園芸など特色のある教育活動を行っている。

同校到着後、大会議室に案内されると、同校校長の加藤英明氏よりあいさつがあった。加藤校長は、学校の来歴や、特色のある教育活動について説明すると共に、参加者に歓迎の意を表した。続いて、同会場にて昼食をとりつつ、副校長の本山早苗氏の解説と共に、学校紹介ビデオを観賞した。食事が終わると、グレイスホールにて同校ハンドベル部および聖歌隊による歓迎演奏が行われた。その後は 2 つのグループに分かれ、本山早苗副校長および松井信行副校長の案内のもと授業見学が行われた。数学・科学・体育・地理・応用英会話など様々な授業を見学し、授業によっては訪問団員と生徒の交流の時間も持たれた。数学の授業では、訪問団員が同校生徒にインド数学を教え、応用英会話や地理の授業では、生徒からインドについてたくさんの質問があがるなど、楽しい交流のひとつとなった。この時間には、授業だけでなく施設や設備の見学もあり、訪問団はメディアセンターを訪れた。同校のメディアセンターは、9 万冊の蔵書数を誇り、アクティブラーニングに対応した学習室、自習のためのキャレルデスク、留学生の国際交流コーナー、学園資料室など様々な設備を持ち、訪問団員は素晴らしい設備やその活用方法に高い関心を示した。また、見学中に行われた茶道体験は、訪問団が日本文化の理解を深める機会になり大変好評であった。見学の後は、教職員交流の時間となった。高大連携、カリキュラムの改訂、地域との連携、生徒の学業に対するストレスの有無および対処方法など様々な話題があがり、両国の教職員は質疑応答や意見交換を通して友好を深めた。最後に閉会セレモニーが行われ、訪問

団を代表してサダーナー・パーンデー氏が訪問受入れに対するお礼を述べ、記念品が贈呈された。加藤校長からの訪問への謝辞で閉会セレモニーが締めくくられ、記念撮影後、一行は同校をあとにした。



生徒との交流



参加者の名前と所属校の場所が示された地図の前で

5. 三鷹市立中原小学校（第 4 日）

プログラム 4 日目の 11 月 8 日（水）、一行は三鷹市立中原小学校を訪問した。同校は 1962 年に設立され、生徒数は 570 名である。地域で構成された委員会をもとに学校を運営する「コミュニティスクール」であり、近隣にある小中学校と 3 校で「鷹南学園」を形成し、施設分離型の小中一貫教育を行っているという特徴を持つ。本プロ

グラムで訪問する最初の公立学校ということもあり、文部科学省で学んだ自治体の教育委員会による運営や施策がどのように実践されているか、訪問団は興味津々で学校へと向かった。

訪問団は学校に到着後、校長の大場一輝氏から、インド教職員の訪問を歓迎しており、6年生のクラスを対象にした授業を楽しみにしているとの挨拶を受けた。続いて、訪問団を代表してチャンドラブラバー・パティア氏が「インドと日本の教育制度には似ている点も多く、課外活動やPTA活動は両国の共通点といえる。お互いに多くのものを学び、今後の交流につなげる機会にしたい」と感謝の意を述べた。その後、訪問団から記念品の贈呈を行った。

続いて、大場氏から中原小学校の紹介と、質疑応答の時間が設けられた。訪問団からは、「特別な配慮を必要とする児童への対応について」や「学習方法の中で、暗記をどれくらい重視しているか」などの質問があがった。

質疑応答後、訪問団は1年生から5年生までの授業を見学した。少人数で行われている算数の授業や、音楽・理科の実験など様々な科目の授業を見ることができた。訪問団は授業の様子のみならず、廊下に並んだカラフルなランドセルや児童の作品、防災責任者の表示などにも興味を示し、見学しながらも様々な質問があがった。

その後、6年生の2クラスで訪問団代表による授業が行われた。1組ではヤショーダン・ワゼ氏がインド式かけ算を紹介した。「スートラ」といういくつかのルールを使って行うかけ算を黒板で実演すると、子どもたちのみならず後ろで見学していた先生

からも「えっ、すごい!」「筆算してみたけれど、確かに合っている」と感嘆の声が上がった。2組では、アミタ・トリパティ氏が「インドの子どもの遊び」を紹介し、動画を使いながら、インド独自の遊びや風揚げなど日本でも共通する遊びを楽しんだ。その後、インド教職員は6年生の児童たちと小グループで交流し、子どもたちが英語で自己紹介を行う様子に目を細めていた。

教室での交流が終わると、訪問団は代表児童の案内で体育館へと向かった。体育館では、6年生全員が訪問団を歓迎し、ソーラン節・リコーダー・歌を披露した。最後には、子どもたちと訪問団が男女に別れて2つの大きな円をつくり、くるくる回りながら手をつないでマイムマイムを全員で踊り、訪問を締めくくった。



「インドの子どもの遊び」の紹介



全員でマイムマイムを踊る様子

6. フィールドトリップ（第5日・第6日）

プログラム5日目となる11月9日（木）から10日（金）まで、訪問団は一泊二日で静岡県へのフィールドトリップに出かけた。フィールドトリップの目的は、地域独自の取り組みを行っている学校を訪問すること、ジオパーク見学と文化体験であった。訪問団は品川駅で新幹線に乗り静岡へと向かったが、車中からは雪をかぶった富士山を見ることが叶い、幸先のいい出発となった。

フィールドトリップの一日目は、ESD・国際化ふじのくにコンソーシアムのご協力により、静岡市立玉川小学校・静岡市立玉川中学校を訪問した。その後、バスで伊豆へと移動し伊豆市内に宿泊して温泉や囲炉裏での食事を体験した。二日目は伊豆半島ジオパーク推進協議会のご協力により、ジオリア・浄蓮の滝・山葵沢・達磨山の見学、および伊豆市立天城中学校への訪問を行った。

6-1. 静岡市立玉川小学校（第5日）

プログラム5日目となる11月9日（木）、静岡駅に到着すると一行はバスで静岡市立玉川小学校へと向かった。同校は1873年に設立され、140年以上の長い歴史をもつ学校である。児童数が18名で教職員数が12名と、規模は小さくとも豊かな自然に囲まれた同校では、少人数のクラスに対する指導や学校の美化維持など、大きな学校とは異なる点に訪問団の注目が集まった。

学校に到着すると、図書室で歓迎セレモニーが行われた。熊谷隆弘校長が玉川小学

校の特色を紹介しながら歓迎の挨拶を述べると、インド教職員のヤショーダン・ワゼ氏が返礼を述べた。挨拶に続き、訪問団から学校への記念品贈呈が行われた。続いて、教頭の望月氏から玉川小学校と地域の取り組みについて説明があった。玉川の四季についても写真を見せていただき、地域そのものについても理解が深まった。

その後、訪問団は授業と施設を見学した。授業の様子以外にも、教室内で飼育されている動物や魚、学校農園が訪問団の印象に残ったようで、沢山質問をしながら見学をし、学校を後にした。



書道の授業を見学する訪問団



贈り物のストールを首にかけた校長の熊谷隆弘氏（左）と訪問団のサビャサチ・マジュムダール氏（右）

6-2. 静岡市立玉川中学校(第5日)

玉川小学校を訪問後、一行はすぐ近くにある静岡市立玉川中学校を訪問した。玉川中学校は「Think globally, Act locally」を合言葉に、すべての活動がユネスコスクールの活動につながるよう意識して取り組む学校である。お茶の栽培や太鼓など、独自の取り組みが訪問団の目を引いた。

到着した時間帯はちょうど給食の時間であった。訪問団は給食ではなく別の食事を取る予定であったが、生徒自ら配膳をする様子を見学させていただいた。昼食後は、パソコンルームに移動し、良知佐代子校長による歓迎の挨拶と訪問団代表のニシャ・アチャリヤ氏による返礼の挨拶が交わされた。良知氏は、挨拶に続けて英語で学校紹介のプレゼンテーションを行い、ユネスコスクールとしての同校の取り組みや、生徒たちの活動について紹介を行った。その後、質疑応答の時間が設けられた際には、「山村留学について」「お茶の栽培に使用する肥料について」など、多くの質問が上がり、活発な意見交換がなされた。

その後、訪問団は学校で生産している玉川茶をいただいた。英語で飲み方の説明が書かれた用紙がついたお茶のプレゼントを一人ひとり手渡していただき、訪問団は非常に喜んでいた。休憩を終えると、校内施設や週末の発表会に合わせて生徒がプレゼンテーションの練習をしている様子を見学した。プレゼンテーションの内容についても通訳があったため、理解が深まった。

訪問の最後には、全校生徒による「玉川太鼓」の演奏があり、訪問団からは「インドの学校に来てもらい、演奏してほしいと

思うほどすばらしかった」という感想があった。演奏後は全員で記念撮影をし、玉川中学校への訪問を終えた。



給食を生徒自ら配膳する様子



生徒全員による玉川太鼓の演奏

6-3. ジオリア(第6日)

11月10日(金)の朝、一行は伊豆半島ジオパークミュージアム「ジオリア」を訪問した。静岡フィールドトリップの2日目は、伊豆半島ジオパーク推進協議会の受入れ協力により実施されたため、ジオリアでは伊豆半島ジオパーク推進協議会への挨拶と伊豆半島の成り立ちについての説明、ジオリア内の展示見学を行った。特にプロジェクション・マッピングを用いた伊豆半島

の説明や、日英の両言語で説明が書かれた展示に訪問団は関心を寄せていた。



ジオリアで伊豆半島の地理的特徴について学ぶ訪問団



ジオリア見学

6-4. ジオサイト（浄蓮の滝、山葵沢、達磨山）（第6日）

訪問団は同日の午前は浄蓮の滝と山葵沢を、午後は伊豆市立天城中学校への訪問をはさんで達磨山を見学した。この三箇所はいずれも伊豆半島のジオサイトであり、伊豆半島ジオパーク推進協議会の研究員である朝日克彦氏がそれぞれの見学先でジオサイトとしての特徴等について訪問団への説明を行った。

浄蓮の滝では、近隣の地域の地形について説明を受けながら、滝を見学した。気持ち

ちのよい気候で、滝とともに周辺の美しい自然を楽しみながら学ぶ時間となった。

その後訪問団は山葵沢へと移動した。ここでは、代表の3名が山葵引抜き体験を行った。引抜き体験のあとは、出荷されるまでの作業を見学した。訪問団からは「食べることができる部分はどこからどこまでか」「日持ちはするのか」「市場での値段は」など色々な質問があがった。前日に宿泊した旅館でも、山葵沢見学後にも山葵を含む食事を摂る機会があり、2日間ですっかり山葵に親しんだ様子であった。

伊豆半島ジオパークでの最後の訪問先として、一向は達磨山へと向かった。展望デッキから伊豆半島北部の風景や富士山を眺め、伊豆半島の地形ができた成り立ちを目で見て学んだ。インド教職員にとって、学びとともに美しい自然を満喫する時間となった。



地形の説明を受けながら浄蓮の滝を見学する様子



山葵出荷工程の見学

6-5. 伊豆市立天城中学校（第6日）

同日の午後、山葵沢訪問後に訪問団は伊豆市立天城中学校を訪問した。同校はユネスコスクールの加盟校であり、地域の活性化をテーマにESDの視点を取り入れた「天城学習」を実践している。前日にもユネスコスクールを訪問したことから、ユネスコスクールとしての取り組みに期待を寄せつつ学校へと向かった。

学校に到着すると、会議室で校長の日吉隆徳氏から歓迎の挨拶があった。日吉氏は挨拶の中で、「天城中学校で今朝見られた足跡」の写真を見せながら、足跡の持ち主である動物は何か？というクイズを取り入れながら天城中学校を取り囲む自然環境についても説明を行った。続いて、訪問団を代表してサビヤサチ・マジュムダール氏の挨拶があった。

その後訪問団は校内を見学した。体育では柔道、音楽では琴と伝統的な学習内容を扱う様子を見ることができ、参加者は喜んでいた。また、理科室で実験の授業を見学していた際には、理科系の科目を担当している参加者が内容について質問する姿も見

られた。

授業見学を終えると、体育館で全校生徒との交流会が行われた。生徒自ら英語で準備した学校紹介のプレゼンテーションと、インド教職員への質問コーナーがあり、「カレーはどれくらい頻繁に食べているのか」「カレーのおいしさの秘密は」といった日常的な疑問から、「学校行事について」「先生と生徒の関係は」「部活動」といった学校関連の質問まで幅広い質問があがった。その後、全校生徒による歌のプレゼント（校歌）と訪問団からの記念品贈呈があり、握手を交わしながら訪問をしめくくった。



日吉隆徳校長による学校紹介の中で行われた足跡クイズ



授業見学の様子

7. 日印教育交流会議（第7日）

プログラム7日目となる11月11日(土)には、日本出版会館の会議室にて日印教育交流会議が開催された。参加者は、訪問団15名と公募によって集まった日本の教職員15名の計30名であった。当日は、下記の日程でプログラムを実施した。

<午前の部 10:00～12:00>

- ・アイスブレイク
- ・グループ別意見交換

<昼食 12:00～13:00>

<午後の部 13:00～17:00>

- ・インドを訪問した日本教職員の発表
安藤 俊明 氏（大田区立大森第三中学校）
- ・グループ別意見交換
- ・訪問団によるプログラム報告
ヒマーシュリー・バッタチャリヤ氏
（インド環境教育センター）
- ・訪問団へのプログラム参加証明書授与

この交流会は、インドの教職員にとっては「プログラムの締めくくりに日本の教職員とじっくり意見交換をし、プログラム期間中に生じた疑問を直接聞くことのできる最後の機会」、日本の教職員にとっては「インドの教職員と出会い、直接交流する機会」と捉え、午前中から午後の前半までは意見交換を中心とした交流会を実施、午後の後半には、この1週間のプログラムについてインド教職員が発表する報告会およびプログラムの閉会式を行うという構成で実施した。

まずはアイスブレイクとして、日本側・インド側それぞれ「参加者の中で首都から最も遠居場所に住んでいる人」一名ずつに地元の言葉での挨拶を全員で交し合い、言葉の多様性を感じたあとに、訪問団のサダーナー・パーンデー氏が簡単なヨガを紹介し、体を温めた。



ヨガの紹介

続いて、同じテーブルに座っている日本とインドの教職員がペアを作り、自己紹介をしながら手元を見ずに、相手の似顔絵を描くというアクティビティを行った。できあがった似顔絵には相手の名前と自分のサインを添えてお互いにプレゼントし、交流会の思い出として持ち帰った。



自己紹介と似顔絵アクティビティ

自己紹介の後は、意見交換の時間に移った。午前中の意見交換は60分間を10分ずつ6パートに区切り、各テーブル6名の参加者が10分ずつ「自分が聞きたいこと・話し合いたいこと」をテーマに話すというものであった。60分の意見交換を終えると、各グループでどんなことが話し合われたのかを全体に共有した。



グループ別の意見交換

午前中の意見交換が終了すると、一時間の昼食休憩を挟み、13時から午後の部を開始した。

午後の部は、2016年に実施した交流会に参加した大森第三中学校の安藤俊明氏による「インド訪問の発表」から始まった。安藤氏はこれまでも複数回インドを訪れた経験があり、2017年の8月には前年の交流会で知り合った先生や学校を訪ねたということで、その経験を参加者に共有していただいた。

報告の中では、「サイエンス・エクスプレス」という電車の中で行われている科学の展示や、訪問先で目にしたICT教育の実践や時間割の紹介などが含まれていた。日本側の参加者は興味深く発表を聞き、インド側の参加者からは「インドの学校を訪問し

てくれて嬉しい、自分の学校でも日本の先生が来てくれるのを待っています」といった声があがった。

その後、午前中とはグループを変えて、再び意見交換を行った。今度は時間を区切らずに、自由なテーマでそれぞれが意見交換をしたのち、全体に共有した。午前と午後を通して、あがったトピックは下記の通りであった。

- ・教師の勤務時間
- ・教員免許やスキルアップについて
- ・伝統文化の教育
- ・理系科目の教育について
- ・英語教育のために共にできること
- ・奨学金
- ・成績優秀な生徒対象のカリキュラム
- ・生徒が自分の専門を決定する時期
- ・大学進学制度
- ・塾
- ・成績のつけ方
- ・学校菜園
- ・保護者との関係
- ・児童・生徒間のトラブル
- ・携帯電話やインターネット犯罪
- ・児童・生徒の安全

その後、参加者それぞれが「今日の交流会で学んだことや今後に生かしたいこと」を3ヵ月後の自分への手紙として書き、同じテーブルで交流した教職員にメッセージをもらい、グループ別の意見交換パートのまとめとした。ここで書いた手紙は、プログラム3ヵ月後の2018年2月に、当日の写真を添えてACCUからそれぞれの参加者に郵送する予定である。

午後の部の後半では、訪問団の代表によ

るプログラム報告を含むプログラム全体の閉会式が行われた。

最初に、本プログラムを主催する国際連合大学サステナビリティ高等研究所の古田知美事務局長、協力機関である文部科学省の里見朋香国際課長、インド大使館のムアンパイ・サイオイー等書記官の3名から一週間のプログラムを終えた訪問団への挨拶があった。

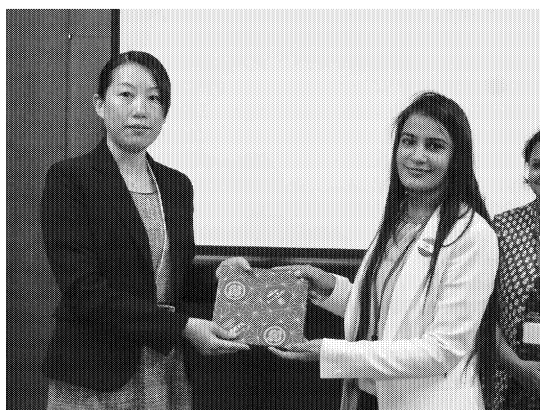
その後訪問団を代表してインド環境教育センターのヒマーシュリー・バッタチャリヤ氏からプログラム報告が行われた。学校訪問を中心に、各訪問先の紹介や感想が述べられた。インドで取り入れたい日本の学校の取り組みとして「地域の文化を学校で学んでいること」「時間に正確で学校が清潔であること」を挙げ、逆にインドからは「インド数学やヨガ、毎朝必ず行われる複数言語での朝礼、多言語教育」をぜひ日本に紹介したいと述べた。

プログラム報告に対して、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）参与の渡辺一雄氏と訪問校である三鷹市立中原小学校校長の大場一輝氏の2名がコメントを述べた。渡辺氏は、『百聞は一見にしかず』の言葉通り、多くのことを学ぶ機会になったことを嬉しく思う」と述べ、交流会で話し合われたいくつかのトピック（教員免許、いじめ、教員の勤務時間）についての追加的な情報や、日本の現状について伝えた。大場氏からは、「インドの先生方の訪問により、学校がインスパイアされ、新しい灯がともったことを感謝します」と延べ、「東京には島もあり、そこでは出航する船で島を離れる人に『さようなら』ではなく再会の願いをこめて『行ってらっしゃ

い』と声をかける。明日帰国される皆さんにも『行ってらっしゃい』と言いたい」と締めくくった。

続いて、ACCU 参与の渡辺一雄氏より訪問団にプログラムの参加証明書が手渡された。感謝を伝えるため渡辺氏の足元に跪くしぐさをする参加者もあり、同席していた両国の参加者・関係者は温かいまなざしで見守っていた。

参加証明書の授与の後には、訪問団と国際連合大学、ACCU との間で記念品の交換が行われた。最後に全員で集合写真を撮り、交流会・閉会式は終了となった。



記念品交換（左：国際連合大学 古田知美氏、右：インド連邦政府人的資源開発省 プージャ氏）



ACCU の渡辺一雄参与による参加証明書授与



参加者全員での記念撮影

第II章

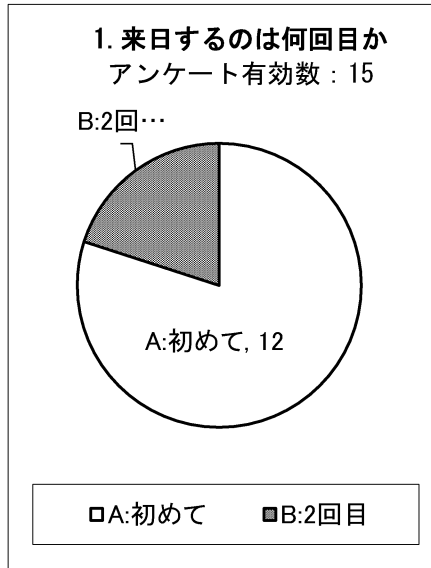
コメントと提案

1. インド教職員
2. 訪問受入れ機関
3. 事業主催者・担当者

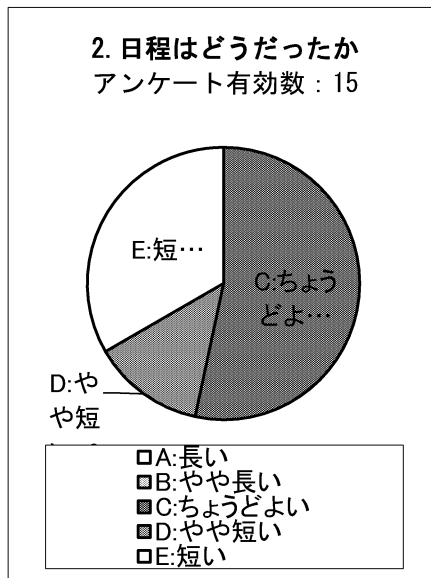
1. インド教職員

*原文は英語。ACCUにて翻訳。

質問 1. 来日するのは何回目か



質問 2. 今回の日程はどうだったか



【ちょうどよい】

- アクティビティとプログラムがうまく構成されていて、訪問先も様々なタイプの

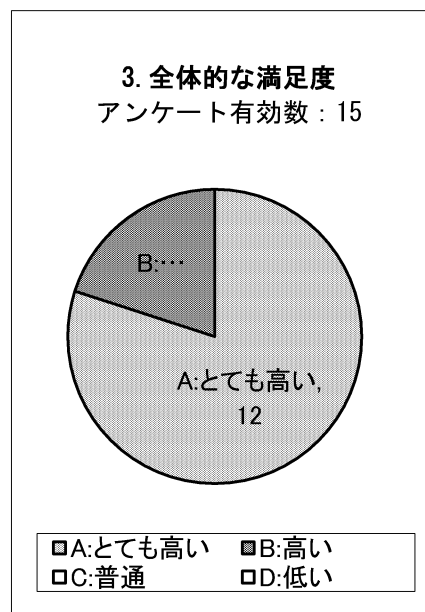
学校が網羅されていました。また、伝統的な生活様式や料理の方法、食事のマナー、慣習を学ぶことができました。(A-6 ユムカイバム・プレマバティ)

- 全プログラムがとてもうまく構成されていました。訪問先の児童・生徒や教職員と交流する時間も十分にありました。(A-8 セヘラ・チャンドニー)

【やや短い・短い】

- 8 日間でも多くの実りのある経験になりましたが、個人的には日本の教育、文化、食、土地を理解するためには最低 14 日は必要だと思います。(A-1 サビヤサチ・マジュムダール)
- 児童・生徒や教職員と交流するための時間をもっととるべきだと思いました。(A-3 ヤシヨードン・ワゼ)

質問 3. 全体的な満足度



【とても高い】

- 学校訪問は異なる教育メソッドを知る素晴らしい経験になりました。(A-3 ヤシヨードン・ワゼ)
- 訪問によってすべてのインド人教員がやる気づけられ、激励されました。(A-4 サダー ナ・パンデー)
- プログラムのテーマである「日本の教育

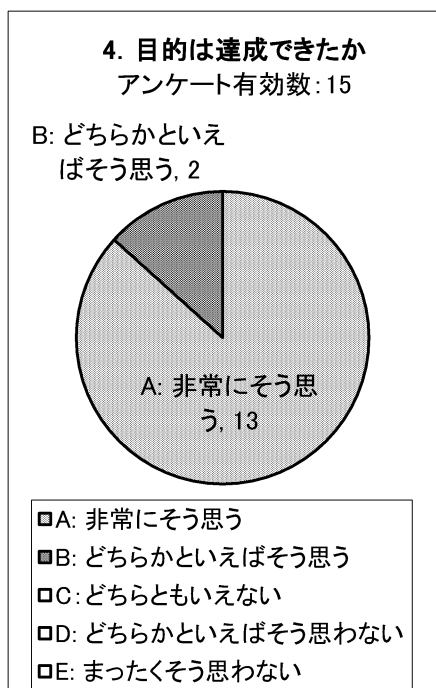
および教育制度を理解する」と言う点において、このプログラムはすべての要望を満たしてくれました。思い残すことはありません。このようなプロジェクトは今後も他のテーマにおいても行われるべきだと思います。(A-6 ユムカイバム・プレマパティ)

- 日本の文化、伝統、教育制度やカリキュラムについて知識を得ました。また、児童・生徒、教職員とも交流できました。(A-12 コニーニカ・デー)
- このプログラムの包括的なアプローチにより、教育・地理・文化・礼儀作法について学ぶことができました。秋という時期の選択もとても良かったです。(A-13 アミタ・トリパティ)

【高い】

- このプログラムは日本の教育制度を知る事の出来た大変充実したものでした。(A-8 セヘラ・チャンドニー)
- このプロジェクトは日本文化と教育を理解することに役立ち、それらを直に経験することができました。(A-15 ヒマーシュリー・バッタチャリヤ)

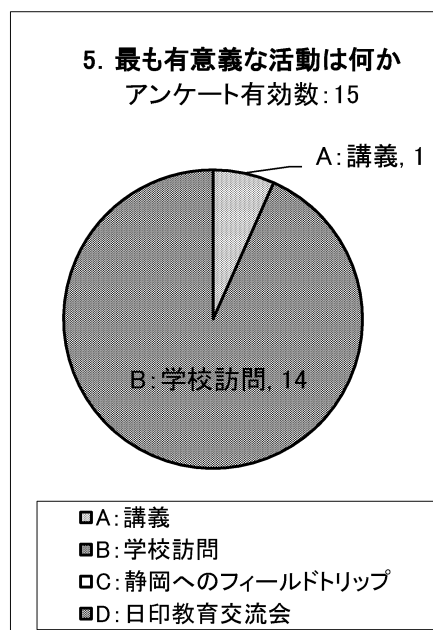
質問 4. 目的は達成できたか



【参加目的】

- 日本の学校教育制度、人々、文化を知ることと、日本の教職員、子どもたちとの交流。(A-1 サビヤサチ・マジュムダール)
- 自己の成長。日本の文化、価値観の吸収。(A-4 サダーナー・パーンデー)
- 日本文化を学びインドに持ち帰り、インドの生徒を豊かにすること。(A-5 ニシャ・アチャリヤ)
- 日本における教え、教わるプロセス、その自己成長と社会発展のための実践方法を理解すること。日本の文化慣習について深く理解すること。(A-6 ユムカイバム・プレマパティ)
- 日本の教育制度について知ること。日本とインドの教育制度の共通点、相違点を見付けること。日本の制度から何かしらを見付けること。(A-8 セヘラ・チャンドニー)
- 日本の教育制度を分析し、ESD を伝えるための教育法を学ぶこと。(A-12 コニーニカ・デー)
- プロジェクトを通してサステナビリティに向けたアプローチの方法などにおける、教育の微妙な差異を理解すること。(A-13 アミタ・トリパティ)

質問 5. 最も有意義な活動は何か



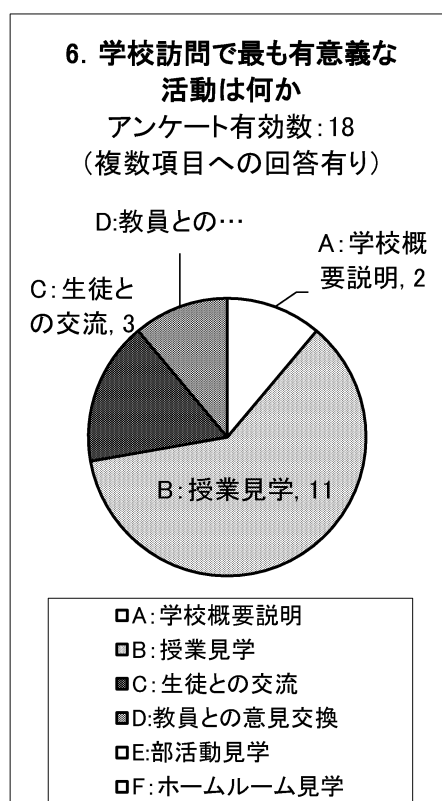
【学校訪問】

- 学校訪問によって日本の教育制度のイメージを掴むことができました。(A-2 チャンドラプラバー・バティア)
- 学校訪問では児童・生徒、教職員との文化間交流の一員になることができました。(A-4 サダーナー・パーンデー)
- 学校訪問では児童・生徒の実際の様子を見学することができました。一対一の交流はとても有益でした。(A-5 ニシャ・アチャリヤ)
- 生徒たちが道徳や人道的価値観、自然保護、慣習的・文化的価値観についてどのように教わっているかということを知りました。(A-6 ユムカイバム・プレマバティ)
- 日本の人々がなぜ仕事熱心であるか、時間に忠実であるか、環境意識が高いのか、おもてなしの心を持ち合わせるのかということを経験で学びました。(A-10 サジ・P・チッティラピリー)

【授業見学】

- 様々な授業風景を見学することで多様な教育メソッドを知る事ができました。(A-3 ヤショーダン・ワゼ)
- 生徒を責任感のある市民へ育てるための「生活による学び」を通じた知識の共有方法を見学することができました。(A-6 ユムカイバム・プレマバティ)
- 授業見学は、ESD がどのように実行されているかを理解するいい機会でした。それとともに、教育人材と使用されている教育方法に関する見識を得ることができました。カリキュラムについても理解を深めました。(A-12 コニーニカ・デー)
- 日本人教員の教育方法、進んだテクノロジー、学校が生徒のために導入している学習方法に触れることができました。(A-14 プージャ)
- 授業見学は教室での意見交換メソッド、児童・生徒の理解度と教科の把握度を見学するのに役立ちました。(A-15 ヒマーシュリー・バッタチャリヤ)

質問 6. 学校訪問で最も有意義な活動は何か



【生徒との交流】

- ESD の観点と個人的な見解からいうと、生徒達との交流は大いに意味があるものでした。(A-1 サビヤサチ・マジュムダール)
- 子どもたちが、初めて出会う人に対してどのように接してくれるかを理解することができたので、有意義に感じました。(A-9 ラジーヴ・クマール)

【学校概要説明】

- 教育の基準に関して知ることができたため。(A-2 チャンドラプラバー・バティア)

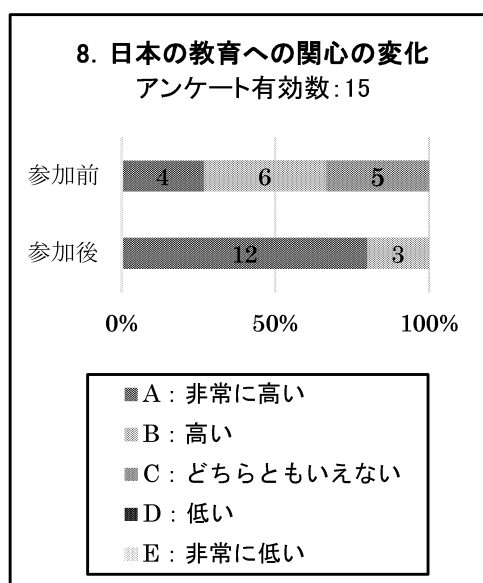
質問 7. 他にどのようなプログラムがあったらよいか

- 海岸部へのフィールドトリップ、教員との交流、出発前のインドでのオリエンテーション、参加者による参加後の活動など。(A-1 サビヤサチ・マジュムダール)
- 共同プロジェクトを行いたいです。(A-2 チャンドラプラバー・バティア)
- 日本の継承文化を学ぶ機会があればいいと思います。(例：和太鼓、柔道、ハンドベル、合唱、ピアノ等の体験や配膳の実践) (A-4 サダーナー・パーンデー)
- 生物多様性に関する共同プロジェクト、

生物多様性、環境学習、世界遺産教育に基づく交換プログラム、文化間学習に参加したかった。(A-6 ユムカイバム・プレマバティ)

- 高等学校への訪問もプロジェクトに含めてください。学校での交流時間をもっと長くってください。我々を（来客としてではなく）学校の一員としてとらえてください。(A-10 サジ・P・チッティラピリー)
- コミュニティ発展のための。インドと日本の児童・生徒によって行われる共同プロジェクト。(A-13 アミタ・トリパティ)
- 教員とともにこのようなインド日本間でのプログラムをもっと行いたいと思います。児童・生徒同士の文化交流プログラムも行いたいです。(A-14 プージャ)

質問 8. 日本の教育全般への関心の変化



【関心が高まった】

- 子どもたちのより良い将来のために頑張る教職員の姿を、訪問先の学校で見ることができました。(A-8 セヘラ・チャンドニー)
- プログラムに参加する前は、日本の教育は児童・生徒に道徳や技術を身に付けさせるものだと思っていました。そして学校訪問を通して、その理解は間違ってい

なかったと感じました。(A-9 ラジーヴ・クマール)

- 日本の方々はとても体系的に、忍耐強く、そして熱心に教育を実践しています。(A-11 シラジャ・T・R)
- 当初、私のグローバル教育に関する見解はとても限定的であり、特に、日本の教育はとても従来のなものであると考えていました。しかし、訪問を通して伝統と現在が織り交ぜられていること、テクノロジーが日本の教育制度を充実させていることを見て取ることができ、とても驚きました。(A-12 コニーニカ・デー)
- 交流は本物でした。日本の教育制度に導入されている勤勉な努力と誠実な姿勢は素晴らしいです。(A-13 アミタ・トリパティ)
- これまでは、日本の教育にそれほど詳しくありませんでしたが、今は日本の学校における衛生プロジェクトについて、もっと学びたいと考えています。(A-14 プージャ)

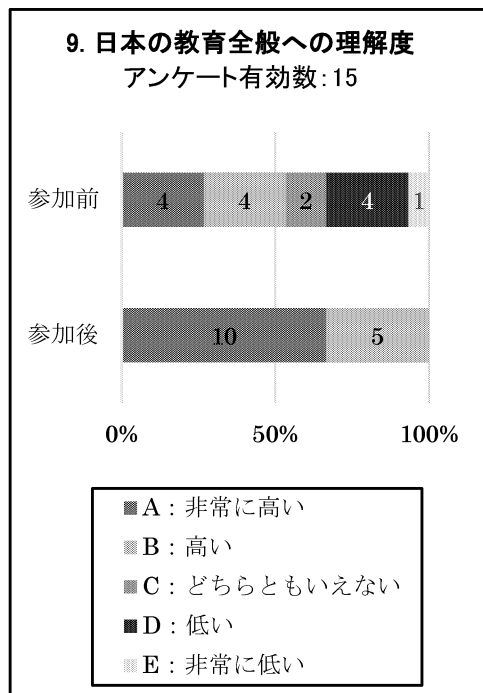
【変化なし】

- 価値に重きを置いた制度だと思います。(A-2 チャンドラプラバー・バティア)

【関心が高まらなかった】

- 日本の学校制度には多くの長所がありますが、外国語教育と児童・生徒の語学能力には改善の必要があると思います。(A-7 ヴィノード・クマール)

質問 9. 日本の教育全般への理解度の変化



【理解が深まった】

- 道徳教育に重きが置かれているところに感動しました。(A-3 ヤンヨーダン・ワゼ)
- 日本の教育制度についての自身の視点がより明確になりました。(A-9 ラジーヴ・クマール)
- 学習指導要領が文化、伝統、環境を保持することを可能にするように組まれていることを学びました。(A-10 サジ・P・チッティラピリー)
- 規律正しさと、時間の正確さは日本の教育をモデルにしています。ESD と自然からの学びは注目に値します。学校菜園などの課外学習は、インドの学校にも科目として導入したいと思うような大きな刺激を与えてくれました。(A-12 コニーニカ・デー)

【変化なし】

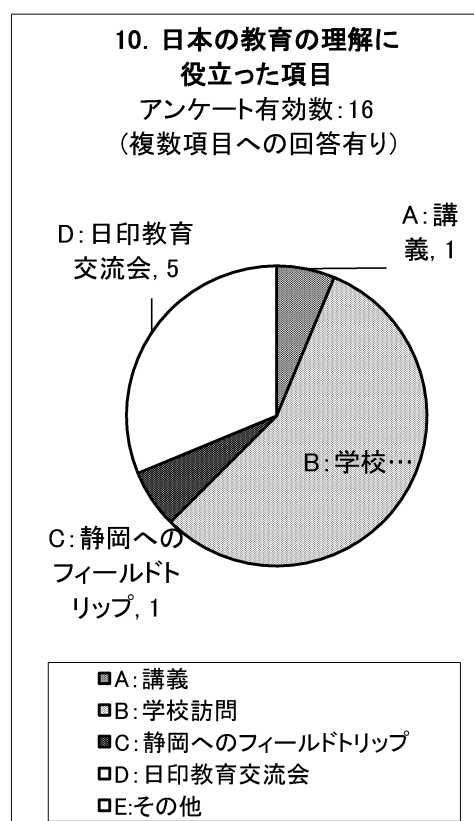
- 学びの多いとても良いプログラムでした。ESD は日本の教育制度の中核です。(A-2 チャンドラプラバー・バティア)
- プログラム参加前から、日本の生徒たちは持続可能な開発に直接関わり、子供の権利を重視した教育のもとで学んでおり、学校のサポートで教育を通して文化を学

んでいると認識していました。プログラム参加後にも、上記の印象が間違っていないかと思っと思っています。先生方との交流によってさらに理解が深まりました。(A-6 ユムカイバム・プレマバティ)

【理解が深まらなかった】

- 日本の教育制度はとても良いのですが、いくつかの抜本的な変革が必要です。教職員の労働時間がきわめて長いことに驚きました。(A-7 ヴィノード・クマール)

質問 10. 日本の教育全般への理解に役立った項目



【学校訪問】

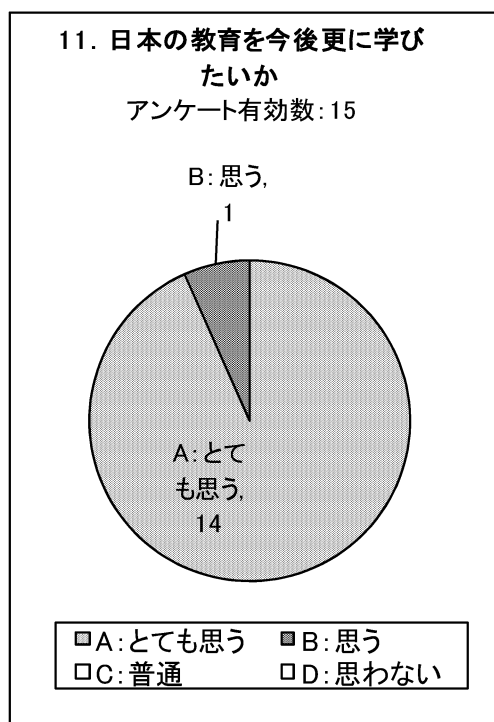
- 学校菜園、折り紙、給食、掃除と衛生環境の保持といった具体的な体験を見学できました。(A-4 サダーナー・パーンデー)
- 様々な学校を訪問することによって、実践的なアクティビティ、ESD に関する知識を発達させることができました。(A-11 シラジャ・T・R)
- 学校訪問によって、教育制度の中核をな

す部分である「教員」と「生徒」と直接交流する機会を得られました。(A-14 ブージャ)

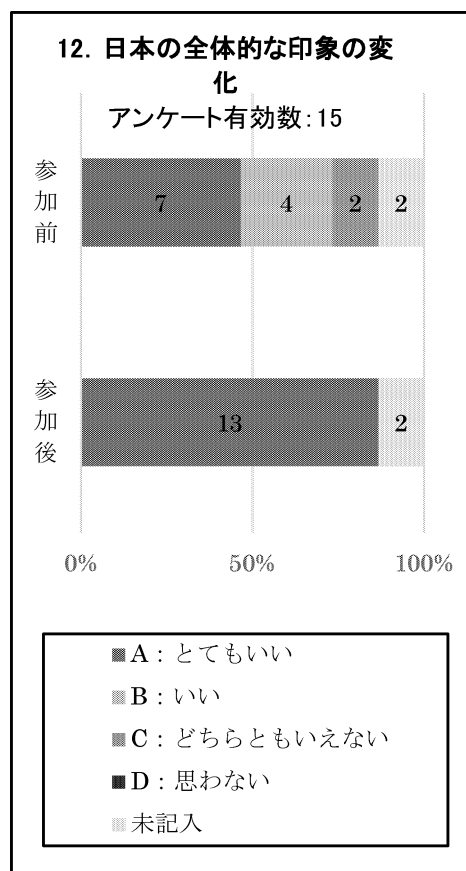
【日印教育交流会】

- 本当の教育現場について知る事ができました。(A-7 ヴィノード・クマール)
- 交流会では、日本人教員たちとの交流を通して、自分の持っていた疑問点をすべて質問でき、それに対する満足 of いく回答を得られました。日本人たち教員との談話から素晴らしい時間を過ごすことができました。(A-8 セヘラ・チャンドニー)
- 交流会の、特にディスカッションのセッションを通して、日本に関するあらゆる情報がインド人教員の中に取り込まれました。(A-12 コニーニカ・デー)

質問 11. 日本の教育を更に学びたいか



質問 12. 日本の全体的な印象の変化



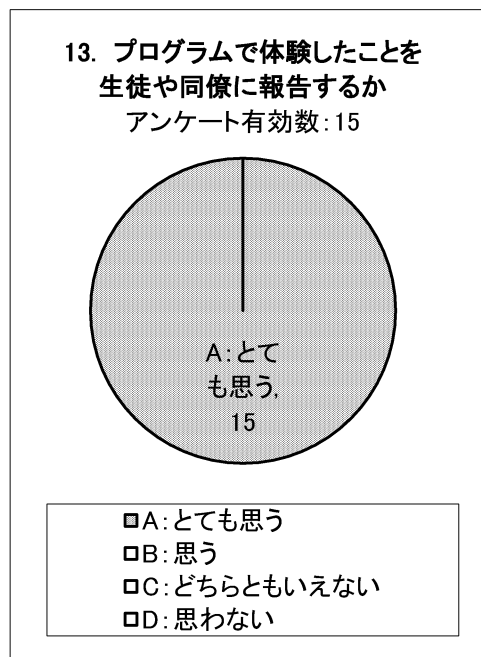
【変わらずとても良い印象】

- 日本人の献身、国への愛、規律的な生活、そして時間への正確さをインドに持ち帰りたいです。(A-2 チャンドラプラバー・バティア)
- 訪日前の日本人へのイメージは、時間に忠実で優しく、伝統的であるというものでした。訪日後もその印象は変わりませんでした。(A-3 ヤショーダン・ワゼ)
- 文化的価値観が修学年次の初期に強化されていると思います。(A-9 ラジーヴ・クマール)
- 日本人は時間に忠実で高水準のおもてなしの精神を持ち、文化と伝統の保持にも努めています。清潔観念が社会の一部になっています。(A-10 サジ・P・チッティラピリー)

【とても良い印象へ上昇】

- 日本の人々は大変規則正しく時間に忠実です。そして強い清潔観念を持っています。日本人は豊かな文化を有しそれを誠心誠意従っていると思います。(A-8 セヘラ・チャンドニー)
- プログラム参加前は、インターネット等を通して限られた情報しか知りませんでしたが、日本の人々の温かいおもてなしはすばらしいものでした。規律正しさと時間への正確さはインドに持ち帰りたいです。日本の文化と食と浴衣が大変気に入りました。(A-12 コニーニカ・デー)
- 参加前は誠実さ、時間への正確さ、決断力、勤労、忠誠心、そして自国の伝統文化への尊敬という印象がありましたが、プログラムに参加してまさにその通りであると思いました。(A-14 プージャ)

質問 13. プログラムで体験したことを生徒や同僚に報告しようと考えているか



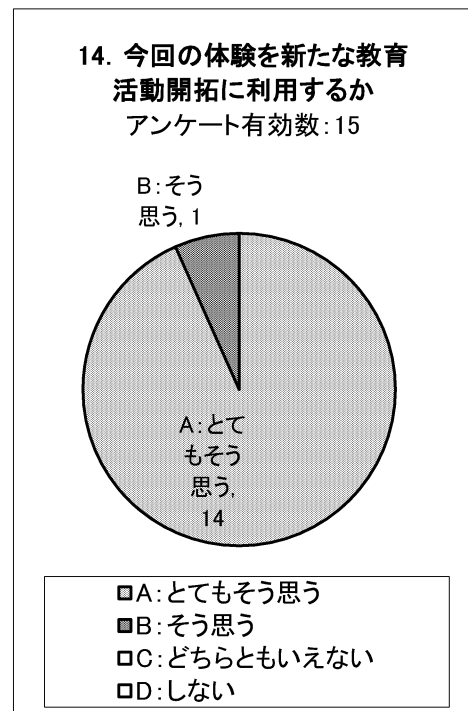
【とてもそう思う】

- 同僚や子どもたちにも私の体験を伝えたいです。両国間の協力と理解によって二国間の絆を深めたいです。(A-2 チャンドラブラバー・バティア)
- もちろんです。日本の価値観を自身の授業にも取り込みたいと考えています。

(A-4 サダーナー・パーンデー)

- もうすでにこのプログラムのレポートを書きました。同僚たちにプログラムの写真を見せたり、訪問先でもらった冊子やパンフレットを見せたりしました。(A-8 セヘラ・チャンドニー)
- 当然のことながら、私の同僚だけではなく、コルカタにある 80 もの学校にいるすべての教職員が私の一週間の滞在経験を聞くのを待ち望んでいます。日本の教育の何点かのポイントを自身の教育制度にも導入しようと思います。(A-12 コニーニカ・デー)

質問 14. 今回の体験を新たな教育活動開拓に利用するか



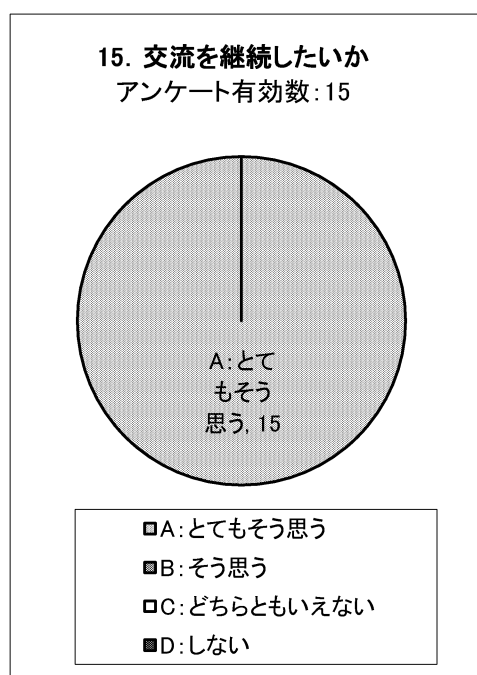
【とてもそう思う】

- 生徒たちによる学校清掃は自身の学校の授業割にも導入したいです。(A-2 チャンドラブラバー・バティア)
- 資料の保存、しっかりとしたプランニング、折り紙などのより多くの活動などを活用したいです。(A-4 サダーナー・パーンデー)
- プログラムでの学びを通して、生徒の強みを見つけ、生徒を励ましその強みを理

解させる、そして個人に見合ったゴールに到達できるように自信をつけさせたいと思います。(A-6 ユムカイバム・プレマバティ)

- 持続可能な環境は教育学習において優先事項であるべきです。生徒たちに地元の文化、伝統について普及したいと思います。地元の伝統と文化を擁護するプロジェクトを立ち上げようと思います。(A-10 サジ・P・チッティラピリー)
- 授業見学で目にした、子どもたちのボキャブラリーを増やすカードゲームを活用したいです。また、パフォーミングアーツの授業で楽器音楽を導入しようと思います。学校において児童・生徒と教職員が共同で清掃にあたっているという点は、本当に特筆に値します。(A-12 コニーニカ・デー)

質問 15. 交流を継続したいか、どのように継続したいか



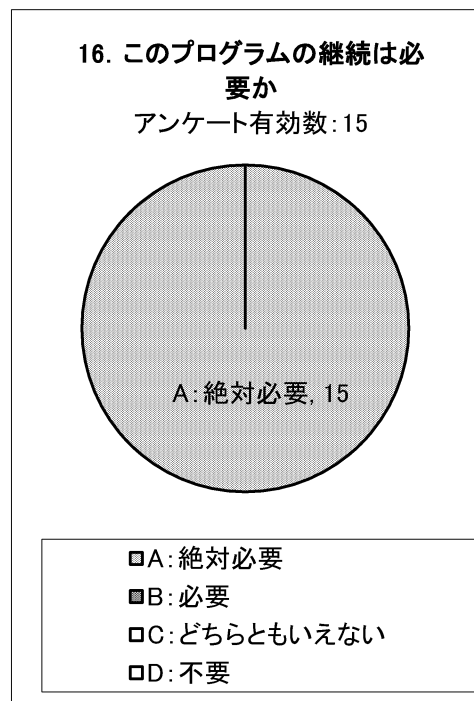
【とてもそう思う】

- SNS やメッセージアプリを通じて交流を続けたいです。(A-1 サビヤサチ・マジュムダール)
- 相互の友情をはぐくみ、教育上の問題について議論し、教育方法について意見交

換を交わしたいです。(A-10 サジ・P・チッティラピリー)

- 手紙、E メール、チャット、学校訪問、教員人材の交流を行っていききたいです。(A-12 コニーニカ・デー)

質問 16. このプログラムの継続は必要か



【絶対必要】

- 相互の健全な意見交換と伝統交流の場になると思うので継続を強く望みます。(A-4 サダーナー・パーンデー)
- このプログラムでインド教職員たちは新たな文化と伝統にふれ、学習指導要領について学ぶ機会を得ることができました。それによってインド教職員たちは自らを省みて、自身のカリキュラムを更に発展させていくことと思います。(A-10 サジ・P・チッティラピリー)
- この国際教育交流プログラムは、私たちがこれからのグローバル教育を推進していく人材として成長させてくれました。(A-12 コニーニカ・デー)
- 教育、文化、科学、テクノロジーにおける価値のある思想と理想は二国間の関係を強めてくれると思います。(A-14 プージャ)

総括（代表者 2 名）

びの機会となりました。この交流事業がこれからも同様の趣旨のもとで行われることを望みます。

●インド連邦政府人的資源開発省（MHRD） プージャ

今回のプログラムは教育的、また文化的視点からも非常に有意義なものでありました。最大の学びは日本の教育制度を実地レベルで知ることのできた学校訪問にありました。総合的な構造基盤、教育の手法、児童・生徒と教職員による清掃活動や見学した学校で行われていた学校菜園の取り組みが時間割・文化的活動に組み込まれており、全ての児童・生徒が関わっているという点が大変印象的であり、我々にとって学びの多い、インドの教育制度にも取り入れたいと感じる部分でした。

このプログラムは日本文化と見事なおもてなしに触れる素晴らしい機会になり、日印の将来における友好関係をさらに強めるものとなりました。

●インド環境教育センター（CEE） プログラム・オフィサー ヒマーシュリー・バッタチャリヤ

第 2 回目となるインド教職員招へいプログラムは素晴らしい構成で、全ての参加者にとって大変有益なものでありました。学校訪問、授業見学そして教職員との交流は日本の学校教育を理解し、日本文化を体験するのに役立ちました。それと同様に、インド教職員による授業や質疑応答などを通して子どもたちもまたインドとインドの学校について学ぶことができました。時間割の中に清掃の時間が設けられていること、学校のカリキュラムに日本の伝統文化を学ぶ内容が盛り込まれていることは我々にとって大きな啓発になりました。

このプログラムはただ我々に学校教育について学ぶ機会を提供するだけにとどまらず、日本文化と伝統に触れる機会をも設けてくれました。総合的に今回のプログラムは、我々にとってこれ以上ない経験と学

2. 訪問受入れ機関

●恵泉女学園中学・高等学校

副校長 本山 早苗

プログラムの全体的印象

- 今回のグループの方にとって初めての学校訪問ということで、午後半日だけのご訪問でしたが、できる限り喜んでいただけるよう準備をいたしました。理数系教育に秀でたインドの教職員の方が多かったため、理系の実験室や準備室の見学希望が強かったです。

プログラムの改善に向けた助言

- あらかじめいただいていた訪問団の個人シートにあるご質問に回答し、それを ACCU にお送りし、英訳していただいた資料を準備しておけばさらに良かったと思いました。

プログラム成果

- 生徒達もインドの先生方に積極的に英語で質問したり、インド数学の計算方法について教えていただいたり、音楽をご披露でき、また留学生も一緒に茶道のお点前を体験したりと、短い滞在時間の中で、生徒達と交流いただけたことが、最大の成果でした。インド各地からお越しいただいた先生方を通して、インドについて身近に感じる事が出来たと思います。

苦勞した点

- ACCUの方が事前に本校を訪問の上、打ち合わせできましたし、訪問団の情報も詳しくお送りくださっていたので、困難と感じる場面はありませんでした。訪問団がインド各地からいらしていることや、その地域の情報についてのあらかじめいただいていた資料を拡大して掲示することで、本校の生徒達にも事前に訪問について情報共有することができたのは良かったです。

加えるとよいと思われる活動

- 今回本校では茶道体験をしていただきましたが、書道や華道など、日本文化を体験していただくプログラムを入れることで、より日本の文化や教育を理解いただけたと思います。

●三鷹市立中原小学校

校長 大場 一輝

プログラムの全体的印象

- インド教職員による文化体験授業については、児童はもちろんのこと、参観している私たち日本教職員（小・中）にとっても興味深く、勉強になる内容であった。

プログラム成果

- インドの方々の訪問並びに交流により、互いの理解と友好が深まった。多様性の中で、共通する事柄、独自の事柄の両方を具体的に知ることができた。

苦勞した点

- 時間の設定については、余裕をもって行うことが大切であることを改めて認識した。

加えるとよいと思われる活動

- 日本の文化について知る時間として、博物館や科学館等の見学の機会を一層もてるようにすること。

プログラムの改善に向けた助言

- 事務局の方々のご厚意により、今回も、外国の教職員の受け入れを有意義な形で行うことができた。改めて、感謝を表したい。
このような機会を設けたいとする学校が他にもあり、交流について更なる充実と発展を期待したい。

●静岡市立玉川小学校

教頭 望月 康伸

プログラムの全体的印象

- インドの教育の根底にあるものは、奴隷解放のための教育であるという挨拶が印象に残りました。そのため、学校の中で水槽や飼育かごで飼育されている生物にとっても興味をもたれていたことが心に残っています

プログラム成果

- 子どもたちが、ALT 以外の外国の方と触れ合い、インドという国、様々な言語に興味をもち、自分の世界を広げることができたことが一番の成果だと思います。

苦勞した点

- ACCU の職員の方に来校いただき、打ち合わせができたことで、活動の準備等のイメージをもつことができました。玉川中学校が主の訪問ということもあり、小学校は大きな苦勞はとくにありませんでした。

加えるとよいと思われる活動

- 振り返ってみますと授業参観の折に子どもたちと深く触れ合う機会がもてなかったことが残念でした。折角の機会ですので、触れ合いの場を十分にもてるとよいと思いました。

プログラムの改善に向けた助言

- 通訳が的確な支援をしてくださったことがスムーズな運営に大きく繋がったと思います。訪問団を上手に動かすことができる通訳の働きかけは、とても重要だと思います。

●静岡市立玉川中学校
教頭 町田 洋介

プログラムの全体的印象

- 生徒・教職員にとって貴重な経験となり感謝しています。
- 意見交換の場面では充実した話し合いができました。「インドでは、校外の学校に寮制度があり、生徒数を確保しやすい環境を作っている」という話については、大変勉強になりました。
- 事前の翻訳や訪問団の情報などに、随分助けていただきました。

プログラム成果

- 広い視野で「教育の在り方」を見直す機会となりました。
- 太鼓演奏について大変褒めていただいたことが、生徒の自信に繋がりました。
- 英語を使う場面を設定することで、生徒の英語に対する意欲・関心を高めることができました。

苦労した点

- 外国人の方を招くという滅多にない経験であったため、「言語の問題」と「失礼なことではないか」という点について心配なことが多かったです。

加えるとよいと思われる活動

- 特にありません。

プログラムの改善に向けた助言

- 本当にお世話になりありがとうございました。言葉の問題で、心配なことが多くありましたが、スタッフや通訳の方が十分な人数参加してくださったお陰で、スムーズに進めることができました。ありがとうございました。

●伊豆半島ジオパーク推進協議会
事務局員 松永 一隆

プログラムの全体的印象

- インド半島も伊豆半島と同じく衝突によってできた半島ということで、親近感を持って接して頂いたと思います。今回、ジオパークを訪問することから理科系の教職員が多いということで、地形など随所で疑問に思った点を質問している姿が印象的でした。また、太鼓の演奏や、ジオサイトである達磨山から見る富士山を楽しんで頂くことができて良かったと思います。

プログラム成果

- 伊豆半島ジオパークを外国の方にも楽しんでもらえたこと。伊豆半島の素晴らしさについてある程度理解をして頂いたと思います。報告書で、参加者がどのように感じたのか知ることができるので世界ジオパークを目指して活動していく中で参考になると思います。

苦労した点

- 限られた時間の中で、日本文化や伊豆半島らしさをいかに紹介し楽しみながら理解してもらうかに気を使いました。また、食文化が違う中での食事の手配や時間的な感覚の違いにも若干とまどったところです。(詰め込みスケジュールでなくて助かりました)

加えるとよいと思われる活動

- 本国では味わうことができない体験型プログラムで日本を感じてもらおうと良いと思います。できるなら、ひとつの訪問先にゆっくり1日滞在して様々な交流ができると良いと思います。

プログラムの改善に向けた助言

- 文化や生活様式が違うことから、受け入れ側に禁忌事項等の情報提供を十分に行うことでプログラムが円滑に進むと思います。また、質問事項等を事前に把握できれば、質問に答える形での説明もできるので、より良いプログラムとすることができると思います。

- 訪問スケジュール決定後の参加者募集ということで訪問先に興味がある方の参加が多く訪問先に対して興味を示していただいたので、こうした募集を継続していただきたいと思います。

●伊豆市立天城中学校

校長 日吉 隆徳

プログラムの全体的印象

- インドの先生方が、ほんとうに熱心に授業を参観され驚きました。日本の教育システムについて学んで帰ろうという意欲に充ち溢れていました。到着時の代表挨拶の中で本校の教育活動について触れていただきましたが、とてもよく事前学習をしてこられた様子、感動しました。ご自身の学校のようにすを伝えたり、写真などを用意してくださった方もいらっしゃいました。

プログラム成果

- 生徒を対象に行った事前調査では、インドに対するイメージはとても狭く限定的なものであることがわかりました。実際にインドの方と言葉を交わし、握手をしたことでとても身近な存在に感じられるようになったと思います。今後、社会科での学習や国際理解への関心が高まっていくことが期待されます。
- 代表生徒が英語で学校紹介や質問を行ったことはとてもよい経験になったと思います。英語に関心のある生徒にとっては、自分の言葉で伝えたいという気持ちが高まったと思います。また、通訳の方のお仕事がとても素敵に見えました。

苦勞した点

- 外国人を受け入れた経験がなかったため、交流会のイメージがなかなかできあがらず、当日のシナリオづくりに直前まで苦勞しました。生徒が話す英語については、本校勤務の ALT に助言をいただきました。

プログラムの改善に向けた助言

- インドの先生方は分刻みのスケジュールをどう思ったのでしょうか。迎える側としてはよいものをたくさんお見せしたいという気持ちもありますが、ゆったりとしたプログラムの中で、授業参観などにもう少し時間をかけてもよかったのではないかと思います。

3. 事業主催者・担当者

●国際連合大学

サステナビリティ高等研究所
事務局長 古田 知美

11月5日から8日間という短いプログラムでしたが、首都圏及び静岡県における様々な取組をされている学校や教育文化施設への訪問を通じて、インド教職員訪問団の皆様には、日本の学校教育制度及びその現状について、多くのことを体験いただきました。

私は恵泉女学園中学・高等学校の訪問に随行いたしました。校長先生をはじめ教職員の皆様のおもてなしや、生徒の音楽で暖かく迎え入れてくださいました。施設や授業の参観では、インドの訪問団の皆様は、たくさんの質問をされ、日本の教育制度を積極的に学ばれる姿に感銘を受けました。また、インドの先生からの数学の授業を受けた生徒が感嘆し、インドについて調べたことを発表しながら楽しそうに交流を深めていたことが印象的でした。静岡でも、様々な教育機関と交流し、また伊豆半島ジオパーク等も見学され、日本の地理的特徴や都心とは異なる地域文化にも触れていただける機会になりました。このプログラムを通じて、今後とも日本とインドの教育交流の推進に今後ともご尽力いただけることを願っています。

本プログラムの実施にあたり、学校教育現場や教育機関をご視察いただくために、多大なご尽力を賜りました日本・インドの関係者の皆様に改めて感謝申し上げます。

●公益財団法人ユネスコ・アジア

文化センター
人物交流部長 進藤 由美

インド教職員招へいプログラムが始まって2年目の今年、プログラムは随分と斬新的な内容が盛り込まれました。一つは、東京近郊の学校訪問に加え、地方の小規模校

などの訪問も加わったこと。もう一つは、伊豆半島ジオパーク全体を学びの場として、日本の豊かな自然をインドの先生方にご提供できたことです。富士山の麓にある静岡、ヒマラヤ山脈の麓にあるインドには、ジオの性質上似ている点がたくさんありました。先生方には温泉文化も楽しんで頂きました。本年度も同プログラム実施にあたり、実に多くの皆様の御支援と御協力を頂きました。受入校の皆様、伊豆半島ジオパーク推進協議会、静岡市、静岡市教委、静岡大学、日印教育交流会にご参加頂いた日本の先生方には暖かく15名のインドの先生方をお迎え頂き、そして同じ時間、空間を共有頂きました。この場をお借りし改めて御礼申し上げます。

●公益財団法人ユネスコ・アジア

文化センター
人物交流部 高松 彩乃

昨年に引き続き、インド教職員招へいプログラムの企画・運営を担当いたしました。第一回は東京近郊のみでの開催でしたが、第二回は静岡への一泊二日のフィールドトリップを含む日程で、地域の特性を学ぶという点、首都圏に偏らないという点などにおいてプログラムの幅が広がったと感じています。文化やタブーなど、国同士の状況が異なるなか、充実したプログラムをつくりあげていくために多くの方に多大なご協力を賜りました。ここに改めて厚く御礼を申し上げます。

参加者の先生方は、日本で多くのことを学び、吸収すると同時にインドのよい点を日本に紹介したいという強い信念をもっていらっしゃいました。同時に、受入れにご協力いただいた学校でも、図書室にインドに関する本を集めたコーナーを作るなど、海外教職員の訪問を国際理解教育の機会として活用する様子が見られました。

このように参加者側と受入れ側が「お客さま」と「もてなす側」の関係を越えて、互いに影響を与え合い、変化のきっかけとなるような関交流の機会を多く作っていき、今後も尽力してまいります。

付録

1. 実施要項
2. プログラム日程
3. 参加者リスト
4. 関係機関リスト
5. 文部科学省講義資料
6. 写真

◆付録 1. 実施要項

インド教職員招へいプログラム

(2017 年 11 月 5 日－12 日：東京近郊・静岡県)

実 施 要 項

1. 背 景

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) では、我が国とアジア太平洋地域の教職員間の交流を深め、相互理解と友好の促進に資するため、国際連合大学の委託を受け、2002 年より国際教育交流事業を実施し、日韓・日中・日タイ間の相互理解促進、学校間交流に大きく貢献してきた。

2016 年からは、この国際教育交流事業の一環として、さらに多くの国の教職員との交流を図るため、文部科学省、インド連邦政府人的資源開発省 (MHRD)、インド環境教育センター (CEE) の協力のもと、「インド教職員招へいプログラム」が始まった。第 2 回となる今年度は、2017 年 11 月 5 日 (日) から 12 日 (日) までの 8 日間にわたりインド共和国から初等中等教育教職員約 15 名を本邦に招へいする。

2. 目 的

- (1) 日本の教育制度、学校教育の現状や特色ある取り組み (地域との連携、環境教育、部活動など) をインド教職員に紹介する。
- (2) 学校等での意見交換を通じて、日印の教育の質を高める。
- (3) 日本の文化および社会全般に対する理解を深める。
- (4) 訪問する学校や施設などでの交流や日印教職員による教育交流会を通じて、日印教職員の持続的なネットワークの構築、強化に寄与する。
- (5) 日印両国の相互理解と友好を促進する。

3. 日 程

本プログラムは、下記の日程で実施される予定である。

日付	日程	訪問先	活動
11 月 5 日 (日)	第 1 日	デリー出発	
11 月 6 日 (月)	第 2 日	日本到着	オリエンテーション 自由研修
11 月 7 日 (火)－8 日 (水)	第 3－4 日	東京近郊	講義 学校訪問 (授業見学、教職員・児童生徒との交流)
11 月 9 日 (木)－10 日 (金)	第 5－6 日	静岡県	学校訪問 ジオサイト、文化施設訪問および日本文化体験
11 月 11 日 (土)	第 7 日	東京近郊	日印教育交流会 報告会・閉会式
11 月 12 日 (日)	第 8 日	成田出発、デリー着	日本出発、デリー着

4. 参加者数

15 名

5. 参加資格

- (1) インド共和国の国民であること。
- (2) 所属する学校等からの推薦を受けた、インド共和国の初等中等教育 (初等学校・上級初等学校・中等学校・上級中等学校) もしくはノンフォーマル教育センターの教職員であること。(教育行政官及び教育専門家を含む)
- (3) プログラム参加中ならびに参加後も積極的に主に教育分野における日印交流および国際相互理解を深める活動に取り組む姿勢を持つもの。
- (4) プログラムの全日程に参加が可能であること。
- (5) 英語での会話が可能であること。

なお、参加者は、①45歳以下で教員経験3年以上のもの、②環境教育に高い関心を持つもの、③日本の教員、児童生徒、学校との交流を希望しているものが望ましい。

6. 評価と報告

日本出発前(第7日)

- (1) 各参加者は ACCU の用意する評価票に記入する。

帰国後

- (2) 各参加者は報告書を作成し、CEE に提出する。CEE は報告書を取りまとめ、**2017 年 12 月 15 日(金)**までに ACCU に送付する。

7. 渡航費等

ACCU は下記の経費を負担する。

- (1) 往復航空運賃

インド国内の指定された国際空港と、日本国内の指定された国際空港との間のエコノミークラス航空券。

- (2) 宿泊と食事

プログラム期間中の宿泊(朝食含)、およびプログラム期間中の食事。

食事が提供されない場合については食費を支給する。

- (3) 日本国内の移動旅費

プログラム期間中の、自由行動時以外の国内移動旅費。

※上記以外の経費については参加者が負担することとする。

8. 海外旅行傷害保険

各参加者は、プログラム期間中に起こりうる傷害、疾病等の緊急時に備えて、各自の責任において、必ず海外旅行傷害保険に加入すること。

9. 通訳

公式プログラム期間中は原則として日本語と英語間の逐次通訳が行わる。

10. 申請・推薦手続

CEE は参加者を選定し、**2017 年 9 月 4 日(月)**までに参加者リストおよび参加者のデータシート、パスポート控えを揃えて、ACCU へ推薦することとする。データシートの様式は ACCU より送付する。

11. このプログラムに関する照会先

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター 人物交流部 担当:高松・齋藤

〒162-8484 東京都新宿区袋町6番地 日本出版会館

TEL: 03-3269-4498

FAX: 03-3269-4510

E-MAIL: accu-exchange_ml@accu.or.jp

◆付録 2. プログラム日程

1st day /第 1 日	5th Nov. (Sun)	11 月 5 日 (日)
20:20	Departure from Indira Gandhi International Airport, Delhi (JL 740)	ニューデリー(インディラ・ガンディー空港)発(JL740)
	Overnight flight	当日の宿泊: 機内泊
2nd day /第 2 日	7th Nov. (Mon)	11 月 7 日 (月)
07:20	Arrival at Narita airport, Tokyo	東京(成田空港)着
08:30	Leaving from Narita Airport	成田空港発
9:40-10:15	Sightseeing (Pending)	観光(調整中)
10:50	Arrival at Prince Hotel Shinjuku	新宿プリンスホテル着
11:00-12:00	Orientation (At Garnet BC, B1 in Prince Hotel Shinjuku)	オリエンテーション(新宿プリンスホテル地下1階 ガーネットBC)
12:10-12:50	Lunch break (At Siddique, located near the West Exit of Shinjuku Station)	昼食(シディーク新宿西口駅前店)
13:00	Arrival at the hotel and check-in	ホテル着、ホテルチェックイン
	Free time and dinner (individually)	自由時間、夕食(各自)
	Dress code of the day : Casual	当日の服装: カジュアル
	Stay at Prince Hotel Shinjuku (Tokyo)	当日の宿泊: 新宿プリンスホテル(東京)
3rd day /第 3 日	7th Nov. (Tue)	11 月 7 日 (火)
6:30 ~	Breakfast at the hotel (B2F, Buffet Dining Prince Marchè)	朝食(ホテル内 地下2階プリンスマルシェ)
8:50	Leaving the hotel	ホテル発
9:30-11:00	Courtesy visit and lecture from Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology	文部科学省表敬訪問・講義
	Greetings and exchanging souvenir	挨拶・記念品交換
	Lecture: "The Elementary and Secondary Education in Japan"	講義「日本における初等中等教育について」

12:00-16:00	Visiting Keisen Jogakuen Junior & Senior High School (including lunch break)	恵泉女学園中学・高等学校訪問(昼食休憩含む) 恵泉女学園中学・高等学校訪問(昼食休憩含む)
	Arrival at the hotel	ホテル着
16:45	Free time and dinner (individually)	自由時間、夕食(各自)
	Dress code of the day : Business Formal	当日の服装: ビジネス
	Stay at Prince Hotel Shinjuku (Tokyo)	当日の宿泊: 新宿プリンスホテル(東京)
4th day /第 4 日	8th Nov. (Wed)	11 月 8 日(水)
6:30～	Breakfast at the hotel (B2F, Buffet Dining Prince Marchè)	朝食 (ホテル内 地下2階プリンスマルシェ)
8:00	Leaving the hotel	ホテル発
8:50-12:15	Visiting Mitaka City Nakahara Elementry School	三鷹市立中原小学校訪問
12:30-13:30	Lunch break (At SITAL, located near Kichijoji Station)	昼食 (SITAL 吉祥寺店)
14:20	Arrival at the hotel	ホテル着
	Free time and dinner (individually)	自由時間、夕食 (各自)
	Dress code of the day : Business Casual	当日の服装: ビジネスカジュアル
	Stay at Prince Hotel Shinjuku (Tokyo)	当日の宿泊: 新宿プリンスホテル (東京)

5th day /第 5 日	9th Nov. (Thu)	11 月 9 日 (木)
6:30～	Breakfast at the hotel (B2F, Buffet Dining Prince Marchè)	朝食 (ホテル内 地下2階プリンスマルシェ)
8:00	Leaving the hotel	ホテル発
8:45	Arrival at Shinagawa station	品川駅到着
9:10-10:04	Moving to Shizuoka Prefecture by bullet train	新幹線で静岡県に移動
11:15-12:15	Visiting Shizuoka City Tamakawa Elementary School	静岡市立玉川小学校訪問
12:30-16:30	Visiting Shizuoka City Tamakawa Junior High School (including lunch break)	静岡市立玉川中学校訪問 (昼食休憩含む)
19:10	"Arrival at Funabaran and dinner (Funabaran)"	"船原館着、夕食 (船原館)"
	★Amagi Mountain-range Drum Performance"	★「天城連峰太鼓」演奏鑑賞"
	Dress code of the day: Business Casual	当日の服装： ビジネスカジュアル
6th day /第 6 日	10th Nov. (Fri)	11 月 10 日 (金)
	Breakfast at Funabaran	朝食 (船原館)
8:10	Leaving the hotel	ホテル発
8:30-9:15	Study tour at Georia (Izu Peninsula Geopark Museum)	伊豆半島ジオパークミュージアム「ジオリア」見学
9:45-10:25	Study tour at Joren Waterfall (Geosite)	浄蓮の滝見学 (ジオサイト)
10:30-11:50	Study tour at Horseradish Farm (Geosite)	山葵沢見学 (ジオサイト)
12:00-12:45	Lunch break (At Amago chaya)	昼食 (あまご茶屋)
13:00-15:00	Visiting Izu City Amagi Junior High School	伊豆市立天城中学校訪問
15:00	Daruma Mountain watching (Geosite)	だるま山見学 (ジオサイト)
19:30	Back to Tokyo, arrival at the hotel and check-in, dinner (individually)	都内へ移動、ホテル着、夕食 (各自)
	"Dress code of the day: Business Casual	"当日の服装： ビジネスカジュアル
	(Necessary to wear sneakers in the visits to Joren Falls and Horseradish Farm)"	(浄蓮の滝・山葵沢見学時はスニーカーが必要) "

7th day /第 7 日	11th Nov. (Sat)	11 月 11 日 (土)
6:30～	Breakfast at the hotel (B2F, Buffet Dining Prince Marchè)	朝食 (ホテル内 地下2階プリンスマルシェ)
8:30	Leaving the hotel	ホテル発
9:00-9:45	Arrival at the Japan Book Publishers Building and answering a questionnaire of this Program	"日本出版会館到着
10:00-17:00	Japan and India Educational Exchange meeting (including lunch break) Closing ceremony	プログラムアンケート記入" 日印教育交流会 (昼食含む)
17:25	Arrival at the hotel and dinner (individually)	プログラム閉会式
	Dress code of the day: Business Casual Stay at Prince Hotel Shinjuku (Tokyo)	ホテル着、夕食 (各自) 当日の服装: ビジネスカジュアル
8th day /第 8 日	12th Nov. (Sun)	11 月 12 日 (日)
6:30～	Breakfast at the hotel (B2F, Buffet Dining Prince Marchè)	朝食 (ホテル内 地下2階プリンスマルシェ)
7:30	Check-out and leaving the hotel	チェックアウト・ホテル出発
9:15	Arrival at Narita Airport and check-in	成田空港到着・チェックイン
11:45	Departure from Narita Airport, Tokyo (JL749)	東京 (成田空港) 発 (JL749)
18:20	Arrival at Indira Gandhi International Airport, Delhi	ニューデリー着

◆付録 3. 参加者リスト

★ 団長: A-15 ヒマーシュリー・バッタチャリヤ

No	氏名	性別	学校・機関名	職位	教科	州
A-1	サビヤサチ・ マジュムダール	男性	KV No.1 Ishapore	Post Graduate Teacher (PGT)	ビジネス 会計	ウエストベンガ ル州
A-2	チャンドラプラバー・ バティア	女性	KV ballygunge	Teacher	科学	ウエストベンガ ル州
A-3	ヤシヨーダン・ワゼ	男性	Zonal Institute Of Educational Training, Gwalior	Head Master(HM)	社会科学	マディア・プラデ ーシュ州
A-4	サダーナー・ パーンデー	女性	KV No.1, Maida Mill, Bhopal	Primary Teacher	英語	マディア・プラデ ーシュ州
A-5	ニシャ・アチャリヤ	女性	KV Sangathan, New Delhi	Post Graduate Teacher (PGT)	物理	マディア・プラデ ーシュ州
A-6	ユムカイバム・ ブレマバティ	女性	JNV Papumpare	Trained Graduate Teacher (TGT)	物理	アルナーチャル・ プラデーシュ州
A-7	ヴィノード・ クマール	男性	JNV Rakoli	Trained Graduate Teacher (TGT)	商業	パンジャープ州
A-8	セヘラ・ チャンドニー	女性	JNV Nizampur	Trained Graduate Teacher (TGT)	生物 科学	マハーラーシュ トラ州
A-9	ラジーヴ・クマール	男性	JNV W.Medinapur	Post Graduate Teacher (PGT)	総合理科	ウエストベンガ ル州
A-10	サジ・P・ チッティラピリー	男性	JNV Palakhad	Primary Teacher	ビジネス 会計	ケーララ州
A-11	シラジャ・T・R	女性	Bhavan's Varuna Vidyalaya, Thikkakara	Post Graduate Teacher (PGT)	科学	ケーララ州
A-12	コニーニカ・デー	女性	JYOTIRMOY Public School	Trained Graduate Teacher (TGT)	社会科学	ウエストベンガ ル州
A-13	アミタ・トリパティ	女性	RUKMINI DEVI Public School	Trained Graduate Teacher (TGT)	英語	デリー
A-14	プージャ	女性	Ministry of Human Resource Development			デリー
A-15	★ヒマーシュリー・ バッタチャリヤ	女性	Centre for Environment Education	Programme Officer		アッサム州

◆付録 4. 関係機関リスト

United Nations University (UNU) / 国際連合大学

5-53-70 Jingumae Shibuya-ku, Tokyo 150-8925

〒150-8925 東京都渋谷区神宮前 5-53-70

TEL: 03-5467-1212 FAX: 03-3499-2828 URL: <http://unu.edu/>

Dr. TAKEMOTO Kazuhiko

Director, UNU-Institute for the Advanced Study of Sustainability (UNU-IAS)

竹本 和彦

国際連合大学 サステイナビリティ高等研究所 所長

Ms. FURUTA Tomomi

**Administrative Director, UNU-Institute for the Advanced Study of Sustainability
(UNU-IAS)**

古田 知美

サステイナビリティ高等研究所 事務局長

Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) / 文部科学省

3-2-2 Kasumigaseki, Chiyoda-ku, Tokyo 100-8959

〒100-8959 東京都千代田区霞ヶ関 3 丁目 2 番 2 号

TEL: +81-3-5253-4111 URL: <http://www.mext.go.jp>

Mr. MINAMI Tetsuhito

Deputy Director, International Affairs Division, Minister's Secretariat

南 哲人

大臣官房国際課 課長補佐

Ms. TANAKA Mizuki

**Unit Chief, Office for International Strategy Planning,
International Affairs Division, Minister's Secretariat**

田中 みずき

大臣官房国際課国際戦略企画室 海外協力政策係 係長

Embassy of India / インド大使館

2-2-11 Kudan-Minami, Chiyoda-ku, Tokyo 102-0074

〒102-0074 東京都千代田区九段南 2-2-11

TEL: +81-3-3262-8520 Fax: +81-3-3263-5285 URL: <http://www.indembassy-tokyo.gov.in/home.html>

Ms. MUANPUII Saiawi

First Secretary (Information, Education & Culture)

ムアンブイ サイオイ

一等書記官 (情報・教育・文化)

学校訪問・フィールドトリップでご協力いただいた方々

恵泉女学園中学・高等学校

〒156-0055 東京都世田谷区船橋5-8-1

TEL: 03-3303-2115 <http://www.keisen.jp/>

加藤 英明

校長

本山 早苗

副校長

三鷹市立中原小学校

〒181-0005 東京都三鷹市中原二丁目12番13号

TEL: 0422-45-2215 <http://www.mitaka-schools.jp/nakahara-es/>

大場 一輝

校長

内藤 章

副校長

静岡市立玉川小学校

〒421-2223 静岡県静岡市葵区落合103番地の3

TEL: 054-292-2012 <http://www.tamasho-e.shizuoka.ednet.jp/>

熊谷 隆弘

校長

望月 康伸

教頭

静岡市立玉川中学校

〒421-2223 静岡県静岡市葵区落合840番地

TEL: 054-292-2014 <http://www.tamakawa-j.shizuoka.ednet.jp/>

良知 佐代子

校長

町田 洋介

教頭

伊豆半島ジオパーク推進協議会

〒410-2416 静岡県伊豆市修善寺838-1

TEL: 0558-72-0520 <http://izugeopark.org>

菊地 豊

会長

松永 一隆

事務局員

伊豆市立天城中学校

〒410-3215 静岡県伊豆市月ヶ瀬853

TEL: 0558-85-0075 <http://atjs.city.izu.shizuoka.jp/>

日吉 隆徳

校長

高田 英雄

教頭

Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU) ／ 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター

Japan Publishers Building, 6 Fukuromachi, Shinjuku-ku, Tokyo 162-8484

〒162-8484 東京都新宿区袋町 6 日本出版会館

TEL: 03-3269-4498 FAX: 03-3269-4510

Email: accu-exchange_ml@accu.or.jp URL: <http://www.accu.or.jp>

Mr. TAMURA Tetsuo

Director-General

田村 哲夫

理事長

Ms. SHINDO Yumi

Director, International Exchange Department

進藤 由美

人物交流部 部長

Ms. TAKAMATSU Ayano

Programme Officer, International Exchange Department

高松 彩乃

人物交流部 事務専門員

Mr. SAITO Seigo

Programme Officer, International Exchange Department

齋藤 盛午

人物交流部 事務専門員

Ms. KAWAGUCHI Eriko

Programme Officer, International Exchange Department

河口 枝里子

人物交流部 事務専門員

Ms. ITO Tae

Programme Officer, International Exchange Department

伊藤 妙恵

人物交流部 事務専門員

Ms. KANO Yuri

Project Staff, International Exchange Department

加納 有莉

人物交流部 プロジェクトスタッフ

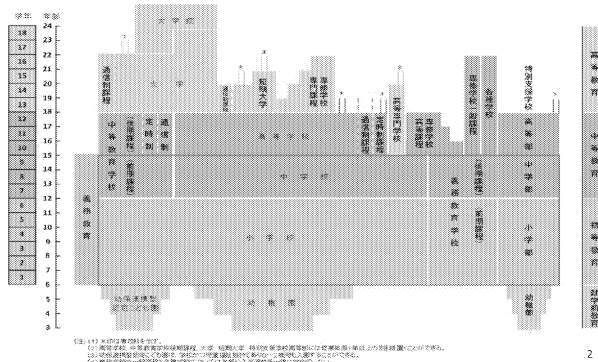
◆付録 5. 文部科学省講義資料

日本の初等中等教育の概要

文部科学省 初等中等教育局
国際企画調整室 市川 清治
平成29年11月7日



学校体系



2

学校数、生徒、教員数

学校種別	設置 種別	授業年限 (年)	通級(在学 年数)(歳)	学校数 (校)	生徒・生徒 数(千人)	中教員数 (人)
幼稚園	国・公 私	-	3~5	4,176 7,076	226.4 7,111.3	21,015 78,941
小学校	国・公 私	6	6~11	29,080 236	6,456.3 77.1	411,586 4,866
中学校	国・公 私	3	12~14	8,626 778	3,144.4 241.5	226,894 15,114
高等学校	国・公 私	3~4	15~17	3,694 1,371	2,251.5 1,047.3	173,322 91,296
中等教育学校	国・公 私	6	12~17	36 17	26.0 7.3	1,972 664
特別支援教育学校	国・公 私	小・中・高 小・中・高 小・中・高	3~17	1,112 13	125.9 0.7	82,979 293

出典：平成28年度 学校基本調査 3

義務教育制度の概要

憲法

第26条 すべて国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する。

すべて国民は、法律の定めるところにより、その保護する子女に普通教育を受けさせる義務を負ふ。義務教育は、これを無償とする。

教育基本法

第5条 国民は、その保護する子に、別に法律で定めるところにより、普通教育を受けさせる義務を負う。

2 義務教育として行われる普通教育は、各個人の有する能力を伸ばしつつ社会において自立的に生きる基礎を培い、また、国家及び社会の形成者として必要とされる基本的な資質を養うことを目的として行われるものとする。

3 国及び地方公共団体は、義務教育の機会を保障し、その水準を確保するため、適切な役割分担及び相互の協力の下、その実施に責任を負う。

4 国又は地方公共団体の設置する学校における義務教育については、授業料を徴収しない。

4

義務教育費国庫負担制度の概要

- 憲法の要請に基づき、義務教育の根幹(機会均等、水準確保、無償制)を国が責任をもって支える制度。
- 市町村が小中学校を設置・運営。
- 都道府県が市(指定都市を除く)町村立学校の教職員を任命し、給与を負担。
- 指定都市は設置する学校の教職員の任命、給与負担を一元的に行う。
- 国は教職員給与費の1/3を負担。



【教員の給与】

- 人材確保法は、教員に優れた人材を確保し、もって義務教育水準の維持向上を図ることを目的として、教員の給与を一般の公務員より優遇することを定めている。

5

教科書制度

【教科書とは】

全ての児童生徒の学校における授業や家庭における学習活動において、重要な役割を担っている主たる教材

<教科書の法的位置付け>

- ①各学校において使用しなければならない = 「使用義務」
- ②文部科学大臣による検定を経る必要がある = 「検定の確保」
- ③国から発行者に対する発行指示、定価の認可等 = 「定価供給の確保」 等

【教科書が使用されるまで】



【教科書無償給付と制度】

- ・我が国においては、教科書の役割の重要性から、その使用義務が法律で定められている。
- ・憲法第26条の義務教育無償の精神をより広く実現するものとして、授業料の不徴収に準じ、教科書が無償給付される。
- ・無償給付の対象は国・公・私立の義務教育諸学校の全児童生徒、その使用する全教科の教科書。
- ・平成29年度予算には、義務教育教科書購入費として、約416億円を計上。

9

「学力の三要素」と「生きる力」について

〈現行学習指導要領の理念〉

- 平成10～11年改訂の学習指導要領の理念は「生きる力」を育むこと
- 「知識基盤社会」の時代において「生きる力」を育むという理念はますます重要
- 教育基本法改正等により教育の理念が明確になるとともに、学校教育法改正により学力の重要な要素が規定

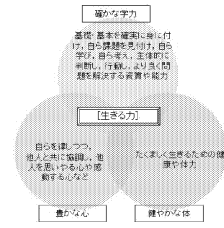
○ 学校教育法（昭和22年法律第26号）

第30条（略）

- ① 前項の場合においては、生理にわたる学習する基礎が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うこととし、特に重要をいふ旨に規定する。

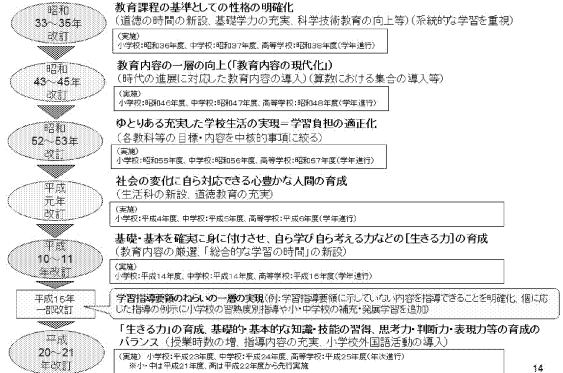
現行学習指導要領においては、これまでの理念を継承し、教育基本法改正等を踏まえ、「生きる力」を育成

「ゆとり」か「詰め込み」かではなく、これからの社会において必要となる知・徳・体のバランスのとれた「生きる力」をより効果的に育成



13

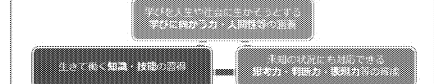
学習指導要領の変遷



14

学習指導要領改訂の考え方

新しい時代に必要な資質・能力の育成と、学習評価の充実



何ができるようになるか

よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む
「社会に開かれた教育課程」の実現
各学校における「カリキュラム・マネジメント」の実現

何を学ぶか

新しい時代に必要な資質・能力を踏まえた教科・科目等の新設や目標・内容の見直し

小学校の外国語教育の教科化、高校の新科目「公共（仮称）」の新設など
各教科等で育む資質・能力を明確化し、目標や内容を構造的に示す
学習内容の刷新は行わない。

どのように学ぶか

主体的・対話的で深い学び（「アクティブ・ラーニング」）の視点からの学習過程の改善

生きて働く知識・技能の習得など、新しい時代に求められる資質・能力を育成
知識の量を増やす、質の高い知識を習得するための学習過程の質的改善

15

主体的・対話的で深い学びの実現

（「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善）について（イメージ）

「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業改善を行うことで、学校教育における質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けるようにすること。

【主体的な学び】

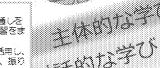
学習に自ら興味・関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って複数の課題に取り組む、自己の学習意欲を高め、主体的に「主体的な学び」が実現できている。



学びと生活に結びつけて、自ら学ぶ力、主体的な学び、資質・能力の育成

【対話的な学び】

学習に自ら興味・関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って複数の課題に取り組む、自己の学習意欲を高め、主体的に「対話的な学び」が実現できている。



学びと生活に結びつけて、自ら学ぶ力、主体的な学び、資質・能力の育成

【深い学び】

学習に自ら興味・関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って複数の課題に取り組む、自己の学習意欲を高め、主体的に「深い学び」が実現できている。



学びと生活に結びつけて、自ら学ぶ力、主体的な学び、資質・能力の育成

【創造的な学び】

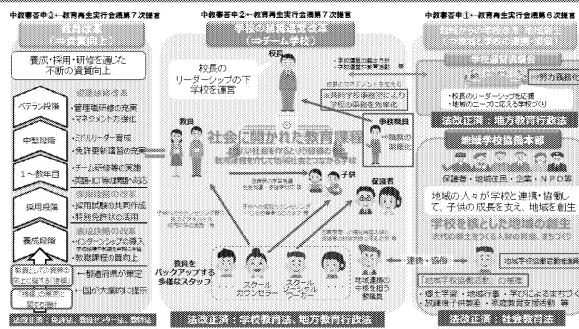
学習に自ら興味・関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って複数の課題に取り組む、自己の学習意欲を高め、主体的に「創造的な学び」が実現できている。



学びと生活に結びつけて、自ら学ぶ力、主体的な学び、資質・能力の育成

16

「次世代の学校・地域」創生プラン（平成29年11月 文部科学大臣決定）の実現に向けて



「次世代の学校」の創生に必要な不可欠な教職員定数の戦略的充実 法改正：義務教育法

子供たちが自立して活躍する「一億総活躍社会」「働き方改革」「地方創生」の実現

◆付録 6. 写真



文部科学省への表敬訪問



茶道体験（恵泉女学園）



ハンドベルに興味津々（恵泉女学園）



図書館で「トットちゃん」の本と（三鷹市立中原小学校）



6年生と折り紙で交流（三鷹市立中原小学校）



学校農園の見学（静岡市立玉川小学校）



授業見学（静岡市立玉川小学校）



学校で作ったお茶のプレゼント（静岡市立玉川中学校）



生徒たちに見送られる訪問団（静岡市立玉川中学校）



ジオリア前での集合写真



山葵沢



浄蓮の滝



だるま山



授業見学（伊豆市立天城中学校）



生徒との交流（伊豆市立天城中学校）

日印教育交流会・閉会セレモニー





●国際連合大学 2017-2018 年国際教育交流事業●
インド教職員招へいプログラム
実施報告書

2018 年 2 月

編集・発行

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

〒162-8484

東京都新宿区袋町 6 番地 日本出版会館

電話 (03) 3269-4498

Email accu-exchange_ml@accu.or.jp

URL <http://www.accu.or.jp>

Printed in Japan by WACO Inc. [100]

©2018 Asia-Pacific Cultural Centre for UNESCO (ACCU)